

十一人の心

小松芳郎

昭和42年8月1日のその日、3年だった私は、昼間から学校でトンボ祭に向けての部活動をしていた。午後5時頃、休憩時間に「深志生が西穂高で死亡」と友達から聞かされた。そのうちに事務室へ新聞記者らしい人々がカメラを手にかけてつてきた。遭難したのは、学年登山の2年生とのこと。事務室へは生徒が心配して集まってくる。先生もどんどんかけつてくる。黒板に「学年登山遭難死亡者名」が書かれていた。母親らしい人が来て、その黒板を見て「本当ですか、ほんとうですか」と先生に聞いていた。7時のNHKニュースでは、まっさきに取り扱われた。校内の電話があちこちでなっていた。

42年前の私の日記をとりだしてみた。

8月2日 水曜日 晴

朝学校へ行った。「本日補習中止」。まだ行方不明者がいるらしい。そのうちに、行方不明の3人の死亡が確認されたという知らせが入った。「死者十一人」。信じられぬ。午後1時30分頃、第一陣の遺体がヘリコプターで校庭に到着。同じクラスの人に運ばれて127教室に。そこで検視され、126教室で納棺される。棺が11個並んでいる。遺族の方々がかけつてくる。母親の泣き叫ぶ声。「ちくしょう、くやしい、どうして母さんをおいていったの、どうして死んだの!」。思わず涙。3回ヘリが来て8遺体が収容された。126教室で3人の遺体の顔をみた。1人をのぞいてどこにも傷はない。ねむっている、本当に眠っているようだ。それだけに悲しい。次々と講堂へ運ばれていく。まだ3遺体は来ない。午後6時頃から講堂で告別式。花で飾られた写真の下に八つの柩が並んでいる。すすり泣きがきこえる。7時頃からもうれつな雨。近くに雷が落ちたようだ。

8月10日 木曜日 晴

午後1時から県営体育館で西穂遭難の学校葬が行われた。会場へ行くと、いろんな所からおくられてきた花輪で一杯であった。1人ずつ献花して入場した。なかも回りはすべて花輪。正面に11人の御霊と写真が、花やお供え物にかこまれておかれてあった。11人に、各1人ずつ特に親しい友人が弔辞を述べたが、それをきいて、僕も涙をおさえることができなかった。最後に、遺族の手で彼ら11人の御霊が、僕らの前から去っていった。しかし、我々の心には永久にのこるであろう。

その時留めた記録から、当時の記憶が蘇ってくる。この時から、私は、「深志」の「志」の文字を、「十一の心」と読み替えて、事故で亡くなった十一人を偲んでいる。